

事例紹介②

津波襲来を想定した避難誘導の研修をふまえた実践 ～保幼小中及び行政の連携～

■ 浅口市立寄島中学校

一 はじめに

今回の東日本大震災は、未曾有の惨事。この世のものとも思えない状況が報道された。三月十一日は、本校の一・二年生が卒業式場の準備をしている最中の出来事だった。生徒たちを直ちに体育館に集合させ、この非常事態を伝えた。帰宅後は地震・津波情報に注意するように指導した。その日の夕方には西日本にも津波注意報が発令されたので、地域住民の方々が本校に避難して来られる場合に備えて、教職員は学校で自主的に待機することにした。

本校は岡山県南西部に位置する瀬戸内海に面した港町、浅口市寄島町

にあり、生徒数は一六五名、教職員二十九名の小規模校である。平成十六年、台風による高潮で、寄島地区も床上浸水等の被害を受けた。そうした経緯もあり、生徒たちはこの惨事に大きな衝撃を受けた。そこで生徒会執行部が中心となり、全校に募金呼びかけ、総額六三四〇円が集まった。義援金は浅口市の寄島総合支所を通じて被災地に届けられた。

震災の被害状況が明らかになる中、危機管理への思いが増していった。毎年、火災や地震対策のための避難訓練は実施しているものの、津波対策の避難訓練は、実施したことがなかった。

一人ひとりのかけがえのない命を、次代を担う子どもたちの命を是が非でも守りたい！そのためにも万一の場合に備え、日頃から危機意識を子どもたちに植え付けておかなければならない。学校・園の施設が隣接している寄島地区では、保育園、幼稚園、小学校、中学校の連携が必要不可欠であると強く感じた。

二 実践の概要

五月になって、保育園、幼稚園、小学校、中学校連携の津波対策合同避難訓練の実施に向け、浅口市教育

委員会、浅口市役所に働きかけた。また、年度末休業中に被災地でボランティアとして活動した市内の中学校教諭を招いて、生徒と教職員で研修した。メディアを通じて被害の状況について知ってはいたが、現場に足を踏み入れ、撮られてきた映像は想像を絶するものであった。

そして、六月一日、寄島中学校において寄島津波対策防災会議（寄島地区災害（地震による津波等）打合せ会）が開かれた。浅口市教育委員会と寄島分室、寄島総合支所、寄島小学校・中学校の連携である。浅口市津波避難誘導計画（平成二十一年三月）に関する意見・情報交換、共通理解さらに避難訓練における保育園、幼稚園、小学校、中学校の連携について話し合った。計画立案の際に苦慮した点は、避難場所の設定であった。避難場所は、①海から反対方向、②より高い場所、③海から反対の心配もなく、④ある程度の広さがあるという条件を満たすものでなければならぬ。しかし、三つの条件を満たす場所は中学校からかなり遠くにはなかった。いきなり遠方へ避難する訓練は、園児たちには過重負担になると思われた。

そこでまず、海岸線から離れるために、中学校から約五百メートル北にある大浦神社横の寄島コミュニティ

ティ広場を第二次避難場所に設定し、保育園、幼稚園、小学校、中学校の合同訓練とすることにした。

園児たちは中学生に慣れ、うまく一緒に避難できるだろうか？園児の歩みほどの程度だろうか？不安な中での実践になった。

三 実践

〈第一回津波対策避難訓練〉

東日本大震災からちょうど四ヶ月目にあたる七月十一日に、津波対策避難訓練を実施した。

今回は、初めての津波対策訓練であるが、隣接する保育園、幼稚園、小学校、中学校の五校園の合同訓練（参加園児、児童、生徒数約四百九十名）として実施した。二キロ程離れたところにある保育園の園児たち（五歳児）も合流しての取組となった。

午前九時五十五分、震度六強の地震が発生し、津波警報が発令されたという想定で、各校園で一斉に校内放送を行った。

放送①「訓練、ただ今、地震が発生しました。生徒は窓から離れ、机の下に入り、身を守りなさい」

放送②「揺れがおさまりました。被害状況を確認しています」

授業担当教員は出入り口のドアを

開け、授業のない教員は分担にもと
づき生徒の状況と避難経路を確認
し、教頭へ報告。緊張感がみなぎり、
時間が長く感じられた。

放送③「生徒は先生の指示に従い、
グラウンドに集合しなさい」

直ちに整列・点呼。保育園と幼稚園
の園児たちは、先生方に付き添われ
て、第一次避難場所の中学校のグラ
ウンドに集合。続いて五百メートル先
の第二次避難場所へ避難指示を出
す。

園児たちは中学生の男子生徒と女
子生徒に手をつないでもらっての避
難開始となった。子どもたちは、安
全に気を配りながら、機敏に行動し、
十八分程度で目的地に全員到着し
た。



到着後、緊急時の対処や避難ルー
トについて確認した。

生徒たちは、園児を気遣いながら
整然と避難できた。中三女子生徒の
一人は「万一の際には、この訓練の
成果を生かしたい」と話していた。

実施前、心配していたことは、生徒
たちの頑張りで霧散した。第二次避
難場所の標高が高くないことが課題
として残ったが、校地外の第二次避
難場所に園児・児童・生徒が整然と
素早く避難するという目的は達成で
きた。初夏の風と潮の香が心地よく
感じられた。

〈第二回津波対策避難訓練〉

東南海・南海地震の発生を見据え
た県の地域防災計画では、地震から
約四時間後に寄島町で二・六五メー
トルの津波到達を予想している。想
定を超える津波の発生に備えるた
め、第二次避難場所を高台に設定し
て、十月十八日（火）に第二回避難
訓練を実施した。

今回の訓練は、前回の反省から避
難場所を高台「学校から約三キロ離
れた北部グラウンド（築地広場）」に
設定して、幼稚園、小学校、中学校
の合同避難訓練（参加園児、児童、
生徒数約四百五十名）を実施した。

今回の訓練では目標が二つあっ
た。一つは、津波に際し、安全かつ
敏速に避難できるように避難経路を

確認すること。もう一つは、実際に
避難することで、実践力を養うこと
であった。一つめの目標は移動開始
から四十三分（想定四十分）で全員
が無事に避難場所に到着できたとい
うことで達成できたと考えられる。
二つめの目標もシミュレート以上の
成果があがったと思われる。



生徒たちは、避難する際の注意
点を守りながら、整然と避難するこ
とができた。「もう少しだよ」「頑張
ろう」と園児を励ます様子や、中
には、「もう歩けない！」と訴える園
児を中学生がおぶって避難する場
面も見られた。本校三年生の一人は、

「小さな子どもが一緒だったので、
車が多い所は気をつけた」と話して
いた。また、「前回よりも、園児た
ちも生徒たちも表情が柔らかくなり
ましたね」と取材にいられたメデイ
アの方々からも、多数お褒めの言葉
をいただいた。

秋の陽にコスモスが映える中、さ
わやかな風が頬を通り過ぎていっ
た。

四 おわりに

頭で理解していることと行動でき
ることとは異次元である。今回の訓
練の成果をもとに課題を洗いだし、
改善を加え、今後も津波を想定した
避難訓練を定期的に実施していき
たい。いざという時に冷静かつ迅速に
行動・対応できるよう危機管理体制
を整備しておく必要がある。津波は
必ずしも子どもたちが学校にいる時
に起こるとは限らない。いつ、どこ
で起こるか分からない。的確な情報
をいち早く入手し、自分で判断し、
避難できるようにと生徒たちに注意
を呼びかけている。

将来、生徒たちが大人になっても
故郷である寄島の地を愛し続けてほ
しい。さらに彼らが中心になってき
め細かな自主防衛組織を形成し、住
民ぐるみで支えあってくれることを
切望している。

※なお、浅口市では、洪水・土砂災
害ハザードマップを作成してい
る。左記アドレスを参照してい
ただきたい。

<http://www.city.asakuchi.okayama.jp/bousai/bousaijyouth.html>
浅口市立寄島中学校

校長 森貞 弘道